

2011 (平成 23) 年度
法務研究科 法務専攻 (法科大学院) B 日程一般試験枠 入学試験問題
「小論文」
(180 分)

注意: 解答はすべて解答用紙に記入し、【問題1】【問題2】の両方に解答すること。

【問題1】以下の文書1は、外山滋比古『思考の整理学』に収められたエッセイ（「グライダー」、「不幸な逆説」）の抜粋である。この文書を読み、以下の設問(A)、(B)、(C)に答えなさい。(配点75点)

- (A) 筆者は、このエッセイのなかで、「優秀な学生ほど卒業論文を作成する際に苦勞する。」としている。下記文書中に現れた筆者の見解から推測される「苦勞する理由」について、解答用紙5行以内で説明しなさい。
- (B) 熱心な学習者を迎えた教育機関、昔の塾や道場の教育方法はどのようなものであったか。筆者の見解から推測される教育方法について、解答用紙10行以内で説明しなさい。
- (C) 筆者の見解をふまえ、法科大学院のあるべき姿と法科大学院生のあるべき学習態度について、あなたの考えを述べなさい。

文書1

「グライダー」より抜粋

勉強したい、と思う。すると、まず、学校へ行くことを考える。学校の生徒のことでない。いい年をした大人が、である。こどもの手が離れて主婦に時間ができた、もう一度勉強をやりなおしたい。ついては、大学の聴講生にさせていただけないか、という相談をもって母校を訪れる。実際の行動には移さないまでも、そうしたいと思っている人はたくさんあるらしい。

家庭の主婦だけのことではない。新しいことをするのだったら、学校がいちばん。年齢、性別に関係なくそう考える。学ぶには、まず教えてくれる人が必要だ。これまでみんなそう思ってきた。学校は教える人と本を用意して待っている。そこへ行くのが正統的だ、となるのである。

たしかに、学校教育を受けた人たちは社会で求める知識をある程度身につけている。世の中に知識を必要とする職業が多くなるにつれて、学校が重視されるようになるのは当然であろう。

いまの社会は、つよい学校信仰ともいえるべきものをもっている。全国の中学生の94%までが高校へ進学している。高校くらい出ておかなければ……と言う。

ところで、学校の生徒は、先生と教科書にひっぱられて学習する。自学自習ということばこそあるけれども、独力で知識を得るのではない。いわばグライダーのようなものだ。自力では飛び上がることはできない。

グライダーと飛行機は遠くからみると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅に滑空しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいぐらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。

学校はグライダー人間の訓練所である。飛行機人間はつくらない。グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじってはいは迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重される。勝手に飛び上がったりするのは規律違反。たちまちチェックされる。やがてそれぞれにグライダーらしくなって卒業する。

優等生はグライダーとして優秀なのである。飛べそうではないか、ひとつ飛んでみる、などと言われても困る。指導するものがあってのグライダーである。

「不幸な逆説」より抜粋

学校がグライダー訓練所のようにになってしまうのも、考えてみれば、やむを得ないことかもしれない。小学校へ入るこどもは、まだ、勉強がよくわかっていないものを知りたい気持ちはあるけれども、どうしたら知識が得られるか、見当もつかない。

とにかく、先生に言われるように勉強しなさい、となる。ひっぱるものがあるから、動き出す。自分で動くのではない。受身だ。

本来の学習がそうであってはいけないのはわかり切っているけれども、制度としての

学校ができてしまうと、各人の自発的な学習意欲を待っているわけには行かない。就学年齢がきまっている。そのときいっせいに学習への準備ができているはずはないけれども、ひっばるのには、いっせいでないと不便だ。ひっばられる方は、なぜ、ひっばられているのかよくわからないままひっばられる。

このはじめの習慣は学校にいる間中ずっとついてまわる。強化されこそすれ、弱まることはない。そればかりか、社会へ出てからも、勉強とは、教える人がいて、読むものがあるものと思っ込んでいる。

学校の最優等生が、かならずしも社会で成功するとは限らないのも、グライダー能力に優れていても、本当の飛翔ができるのではない証拠になる。学校はどうしても教師の言うことをよくきくグライダーに好意をもつ。勝手な方を向いたり、ひっばられても動こうとしないのは欠陥あり、ときめつける。

学校は教育で始まったのではない。いわゆる学校のない時代でも教育は行われていた。ただ、グライダー教育ではいけないのは早く気がついていたらしい。教育を受けようとする側の心構えも違った。なんとしても学問をしたいという積極性がなくては話にならない。意欲のないものまでも教えるほど世の中が教育に関心をもっていなかったからである。そういう熱心な学習者を迎えた教育機関、昔の塾や道場はどうしたか。

(出典：外山滋比古『思考の整理学』(ちくま文庫)筑摩書房(1986年)。なお問題文では、縦書きの原文を横書きに変えており、漢数字を算用数字に変えている。)

2011 (平成 23) 年度
法務研究科 法務専攻 (法科大学院) B 日程 入学試験問題
「小論文」
(180 分)

注意: 解答はすべて解答用紙に記入し、【問題1】【問題2】の両方に解答すること。

【問題 2】 次の文書 2 を読んで以下の設問(A)および(B)に答えなさい。(配点75点)

(A) この文書の著者の述べたいところを、解答用紙10行以内で述べなさい。

(B) 著者は、現代の若者の考え方の特徴として「仮想的有能感」という考え方を引き合いにだして論を展開している。この考え方に賛同できる点と批判されるべき点を、自分自身の体験といった具体例を挙げながら述べなさい。

文書 2

第五章 人々の心に潜む仮想的有能感

他者軽視と仮想的有能感のメカニズム

前章で現代は誰もがこぞって自己肯定感を求める時代であることを見てきた。そして、その自己肯定感の中には特に他者軽視を通して生じる偽りのプライドがあることにも触れた。これを「仮想的有能感」と呼ぶことにする。この「仮想的有能感」という言葉は私の造語である。過去の実績や経験に基づくことなく、他者の能力を低く見積もることに伴って生じる本物でない有能感という意味で、「仮想的」有能感と名づけた。

この仮想的有能感という概念を用いることで、これまで見てきた、他者を教養のない者と見なす人とか、ホームレスを社会のゴミと見なして攻撃した若者たち、自分以外はみんなバカだと思ふ現代人、そして、自分の失敗を認めず、チャーリーのせいにするルーシーのような行動傾向が説明できるように思われる。彼らはすべて、外面的には横柄な態度や行動を示す。これは仮想的有能感を有しているからに違いない。彼らに共通しているのは他者との親密な人間関係が形成されておらず他者を軽視していることである。

彼らは、勝手に他者の能力を軽視することで、偽りのプライド、すなわち仮想的有能感を抱いて行動するのである。これは彼らの中に無意識的に生じる自己防衛的機制とも考えられる。それは、人は誰も常に優れた存在でいたい、人から認められる存在でありたいと思っているためでもある。これまで述べてきたように、現代の人々は自由な社会の中で自我を膨張させている両がある。しかし、他方では産業構造の変化や厳しい現実から、結果としての夢の喪失、自信の喪失がある。この矛盾が、仮想的有能感形成のメカニズムに寄与していよう。

ところで、他者軽視と仮想的有能感の関係のメカニズムは、次のように考えることができる。すなわち、個人的経験や社会・文化的要因によって、本人にもあまり意識されない形で仮想的有能感が形成されると、対人場面などで他者軽視という態度や行動として表面化する。そして、人をバカにした態度や行動をとることによって、「自分は有能だ」という仮想的有能感が強化される。このような繰り返しの中で、仮想的有能感が一層強固なものになっていく。他者軽視と仮想的有能感は、どちらが原因でどちらが結果というものでなく、相互に影響しあうのである。

ただし、ここで見落としてならないことは、他者軽視と仮想的有能感は完全に一対一対応、表裏一体というわけではない、ということである。他者軽視そのものは仮想的有能感だけでなく、本物の有能感、自信のようなものによっても生じる可能性がある。すなわち、現実はどうであれ、自分の有能さを確信している人が、他者の能力を低く見ることはありうることである。

仮想的有能感を持つと他者軽視をされると考えられるが、他者軽視をする人は仮想的有能感ばかりでなく、本物の有能感を持つ場合もある。これ

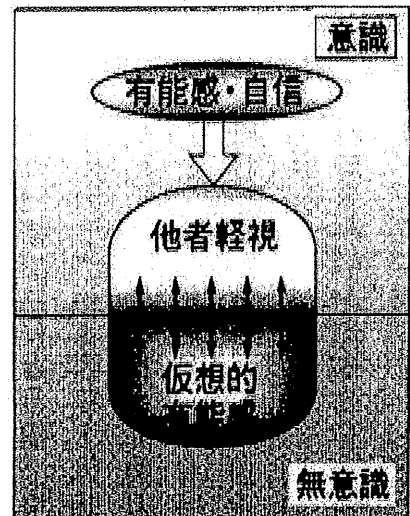


図 5-1 他者軽視と仮想的有能感の関係

を図式化したものが図 5-1 である。ただし、この本物の有能感という概念も不明瞭なところがある。なぜなら「有能感」とはあくまで主観的なものだからである。

仮想的有能感が働きやすいケース

さて、この概念の特徴としてさらに注意しておくべきことは、他者軽視は意識されていても、仮想的有能感を本人が持っているかどうかは、意識されていないという点である。おそらく、「バカな人たちだ、ハハハ」「何やってんだ、子どもでもあるまいし、チエツ」というように、他者軽視的内潜在的言動が生じたときに、ほぼ自動的に誇らしい快感を瞬時に感じる、それが仮想的有能感の正体と言える。

しかし、多くの人たちはその快感について「自分が負け組であることを意識しないように、先手をうって他者を見下げることで生じた有能感やプライド」などと、自ら意識的・分析的に解釈しようとはしない。本人にとっては、無意識的に生じては消えていく感情なのである。実はこのような感情は、防衛機制的な意味で、一種の適応をコントロールしていると見ることができよう。仮想的有能感とは他者軽視という他者評価の裏面に隠された自己評価であるが、認知的なものというよりはむしろ感情的なもので、本人自身には意識しがたいものである。

このような不合理で無意識的な仮想的有能感とは、どのような種類の現実行動と繋がりがしやすいのだろうか。仮想的有能感を持つ人が他者軽視しやすいのは、どのような領域なのだろうか。どんなときに彼らは自分を大きく感じ、どんなときに自分を小さく感じているのだろうか。おそらく、本人のこれまでの経験から明確に推測できることがらに關しては、比較的客観的に見積もらざるをえず、できないことを公然とできるとは言いがたい。一方、その手がかりが曖昧な出来事に対しては、仮想的有能感を介在させ、自分を膨らませるかたちで認知しやすいのではなかろうか。

したがって、あまり自分が経験したことのない領域や、自分に対して評価が定まっていない領域で、仮想的有能感が生じやすいと予想される。例えば、「数学の能力」といったものではあまり機能しないが、「将来を見通す能力」などといった漠然としたものに仮想的有能感とは反映されやすいと言える。

さらに、「他者」軽視に際して、誰を軽視するのかという点に關しては、能力を熟知している親しい他者については機能しにくく、不特定多数の知らない人たちに対して機能しやすいと考えるのが妥当であろう。殊によく知らない他者の失敗などに対して、容易にその人たちの能力を軽視し、仮想的有能感を感じやすい。

しかし、現実には日常的に接している人たちに対して、仮想的有能感を感じることも少なくない。これは、あまりよく知らない人たちを通して形成された仮想的有能感が転移したものだと考えられる。

下方比較で安心する

他者軽視と仮想的有能感との関係は、他者評価と自己評価の関係として見ることもできる。一人の評価者が行う他者評価と自己評価は、決して独立したものではない。他者評価の結果が自己評価に反映されたり、逆に自己評価の仕方が、他者評価に反映されたりする。例えば、自分の専門の分野で、これまで出会ったことのないようなきわめて優秀な人に遭遇し、高い評価を与えた場合、以前に比べて自分を厳しく低く評価することになるかもしれない。また逆に、自分が何らかの賞を与えられて、自己評価自体を高めた場合、他者に対して優越感を抱き、他者についての評価を幾分下げることになるとも考えられる。これは他者評価と自己評価が相反する方向に作用する例である。つまりシーソーのように、他者評価が上がれば自己評価が下がり、自己評価が上がれば他者評価が下がると考えるわけである。

しかし、実は必ずしもそのような変動ばかりではない。例えば後者の例で、自己評価が高まったことに気をよくして他者評価も上げたり、自分でも賞をもらえるのだから他者ももらえるはずだ、ということで他者評価を高めることも考えられないわけではない。これは他者評価が自己評価と同方向に変動する例である。

ただし、再三述べるように、人間は本来常に自分を高く評価していきたい動物である。少数の例外はあるが、その命題を基本にして自己評価と他者評価は影響しあうと考えるのが妥当だろう。このことに関連した心理学的理論を見てみよう。社会的比較理論では、人は自分より低い位置にある人を比較の対象と考えることにより、自己高揚が生じることが、既に指摘されている。つまり、人は自分よりも優れた人物について知りたがっているというよりも、自分よりも劣っている者に関する情報を求めたがっている。このよ

うな傾向を、下方比較と呼ぶ。

自己高揚欲求は、特に自尊感情に対する脅威を感じたときに強く働き、その結果として自分よりも下位にある者との比較によって、自分の幸福感を増大させようとするのである。例えば、数学でいつになく悪い成績をとったとき、いつも数学が苦手な人たちに「何点だった」と尋ねたりして、彼らが予想通り自分より低い点数であることで、自尊感情を保持しようとすることを言う。

この理論では通常、自分より下と思われる友人・知人たちが、比較対象として選択されるが、本書で言う他者軽視の他者とは、主に赤の他人を想定している。大衆と言ってもいいかもしれない。大衆については詳細な情報がなく、自分勝手に、自分より下に見なすことができるのである。例えば、他者の仕事や勉強の達成度を見たとき、情報が希薄な他者の結果を勝手に達成水準が低いものと見なすことで、自己高揚感を高めようとするのが仮想的有能感である。

人はどこの世界でも、あるいは世代を越えて、下方比較することで心理的安寧を得ようとするものようである。大学という社会での教員は、他の学校の教員に比べて地位の違いが明確にされている。助手、講師、助教授、教授という段階が、明瞭に区分されており、給与が異なるだけでなく、教授でなければ大学院生は指導できない、といった教育上の制限が設定されているところもある。

さらに、この地位への昇格に関連して、学位の相違がある。表向き大学教員は、他の小・中・高の教員と異なり、大学卒でなくてもよいことになっているが、現実にはそれは例外中の例外で、通常は大学院で修士課程までなのか、博士課程までなのか、博士学位を有しているか否かが問題となることが多い。したがって、彼らはその学位にきわめて敏感である。ある教員は自分が博士課程まで修了していることを誇りに思っており、同い年の人が修士課程しか出ていなくて大学教員をしていることに対して「あの人は昔ドクターストップがかかった人だから」などと時々他の人たちにこっそり漏らす。また、別の教員はこれまで博士学位など研究の実力とは無関係とうそぶいていたが、博士学位を取得するや否や、「大学人たるもの博士学位を持つのは当然、博士学位のない者は大学教員ではない」というような言い方を院生たちにするようになったという。

このようなことは、特別な教員に限ったことでなく、教員としての地位の差異が明確になりやすい大学においては、他者との「小さな違い」をみつけて自分で優越感を持つようとする人たちが少なくないように見える。「人と異なる独創的仕事をしたい」「優れた業績を残したい」と願うのは研究者である大学教員の宿命であり、上昇志向は望ましいことであるが、人は上昇するために、目標となる自分より上の人ばかりを見つめていることは、つらいことなのかもしれない。時々、いやしばしば、自分より下と思う人を、口に出すか、あるいは心の中だけで叫ぶかの違いはあるにしろ、軽蔑したり批判したりすることで、上昇のためのエネルギーに転化させたり、そこで心理的安寧を得ているのかもしれない。

希薄化する人間関係の中で

他者軽視に基づく仮想的有能感が生じる背景には「希薄化する人間関係」が存在する。簡単に言えば、人は親しい人間関係を喪失し、孤立すればするほど、外面的には傍若無人な他者軽視的行動をとるようになる。つまり、現代の希薄化した人間関係においては、周りが支えてくれるという認識を欠くことになり、他者をむしろ脅威と見なすために、背伸びをして弱い自分を防衛しようとするのである。

では、なぜ彼らは真の自己肯定感を持ってないのだろうか。それは、人の自信というのはつまるところ、親しい人間関係にある周りの人たちから、承認され賞賛される経験を通して形成されることが多いからである。しかるに、そのような親密な周りの人たちが少ない社会では、個人の自信も形成されがたいのである。ただし親密な周りの人といっても、親や兄弟というよりは、それ以外の親しい人の承認や賞賛が大きいように思われる。それは先生であったり、友人であったりするであろう。

周囲の評価に関係なく、適切な自己評価ができれば、実績に応じて自信が高まるはずだとの見解もあるが、それは成熟した大人になってからの話で、発達過程においては周りの温かい賞賛が内面化することで自信がつくことの方が多いたのではなからうか。夫人の場合でも身近な人たちからの好意的な評価は大きな自信になる。特に子どもの場合、たとえ客観的には低い達成水準であるとしても、周囲が承認し励まし続けることで本人が自己期待を強く持ち、現実には自信が形成されることは少なくない。

現代では、若者の友人関係の希薄化が問題視されて久しいが、彼らは友人に無関心なのかといえ、そうではない、むしろ、彼らは異常なほど、物理的に身近な友人の言動を意識している、いや意識過剰である。ただし、友人がどのような人物なのかというこ

とに対してというよりも、友人が自分をどう見ているかに対して意識過剰なのである。最近では中学や高校で、「うれしい」場面でもそのまま感情を表出せず、友人たちの顔色や出方を見たうえで、それを表出するかどうか決める子どもが多いという。自分だけ他者たちと異なる行動をして、異質な存在と見なされることを極端に恐れるためであろう。

自分が他人の目にどう映っているのかを知るためにも、友人をもっと知ればよいのと思われるのだが、彼らは確かに心理的距離を置く傾向があり、概して相手をよく知ろうとしない。コミュニケーションするのが苦手なこともあるが、親密な関係を持つことが面倒でわずらわしく感じられるからなのかもしれない。したがって、友人だちがいかにすばらしいものを持っていたとしても気づかずに終わってしまうことが多い。

彼らの関心はあくまで自分にある。自分を友人がどう見ているかという観点で、友人を意識しているのである。自分が友人をどう見るかということにはさしたる関心もない。友人が生真面目な人であれ、ルーズな人であれ、相手を詳しく知って自分の参考にしようという志向も弱いように思われる。

さらに、現代の若者は特に見知らぬ人たちには一般に冷淡で無関心である。すぐに「カンケーないよ」という言葉を発する。ただし、会って言葉を交わした相手であれば、一応、彼らにとって礼儀やルールを守るべき対象として認識される。しかし、話をしたこともない相手なら、それは仲間ではなく、そうした相手へのマナーや約束は全く無意味で、相手が困るかどうかなど全くカンケーないと考えている。

かつて日本人は地域や会社といった共同体をきわめて重要視して生きてきた。地域に不幸な人がいれば、周りの人たちが経済的、心理的に支援した。また、会社で誰かがミスをして、製品が納期までに納められなくなると聞けば、その人の責任だけを追及するのではなく、会社全体の責任としてみんなで助け合っ、残業も厭わず、納期までに間に合わせる努力をした。しかし、日本人のこのような美しい伝統的心性は、今日ではあまり見られなくなり、自分は自分、他人は他人という考えが浸透し、自分にカンケーがあると思う人の数は、以前よりずっと減少したように思われる。

人間関係のストレス

話は変わるが、正高信男氏は、非ケータイ族はケータイ族に比べてきわめて利他的に振る舞うのに対して、ケータイ族は利己的に振る舞うという実験を示している（『ケータイを持ったサルー「人間らしさ」の崩壊ー』中公新書）。これは現代の若者が携帯電話によって一見人間関係の親密化を図っているように見えるが、実はそうではないことを意味している。ケータイは彼ら自身の不安を取り除く手段として利用されているが、だからといって他者への思いやりとか配慮が育っているわけではないようである。

ケータイを持つ人が相対的には若年層に多いことを考えれば、若者のほうが相手のことを考えず利己的だと言える。もっとも多くの国民がケータイを持つような現代では、年齢にかかわらず、誰もが利己的になっているのかもしれない。登下校中、集団で電車に乗り込んでくる高校生たちは、車内に入るやいなや、ケータイを取り出して片手で黙々と操作し始める。彼らはそこで友人と連絡をとりあっているのかもしれないが、身近に友人がいるときまで、なぜわざわざ他の人たちと連絡をとりあわねばならないのだろうか。一人ひとりがばらばらになって自分というタコ壺の中でしか生活できないような時代がきているように思われる。

大学生と大学教員とのやりとりでも、最近ではメールが発達したせいで、直接依頼すべきところをメールでする人たちが多くなった。私の属している学科の学生は、授業や卒論の作成で調査を実施することが多いが、その依頼を平気でメールで送ってくる。授業にまったく出席していなくて教員側がまったく知らない学生が、「先生の授業で調査を実施させていただけないでしょうか」と突然メールで頼んでくる。彼らにしてみれば、直接会って頼むことは心理的に負担が大きいのであろう。顔が直接見えないところでは、気が大きくなるのかもしれない。メールのような手段は気の小さな者も気が大きくなる力があるように思われる。つまり、対人的スキルの劣る若者たちはメールに頼ることでコミュニケーションを図ろうとしていると言えよう。

ある中学生に一日の中で好きな時間に順位をつけて、と頼んでみたところ、「寝る」「読書」「テレビ」「コンピュータゲーム」が上位であった、と新聞記事は報じている（「朝日新聞」1999年3月21日朝刊）。この結果の特徴の一つは、一人でできることをしている時が、好きな時間であるとしていることであろう。中学生であれば、友人と話したりスポーツをしたりする、他者との交わりが好きな時間として挙げてもよさそうだが、これが個人志向の若者たちの現実なのであろう。

逆の言い方をすれば、現代の若者にとって他の人たちと一緒に何かをすることはかな

りのストレスがかかると推測される。つまり人間関係を形成すること自体が億劫なのかもしれない。もう一つの特徴は、非活動的な「寝る」が好きな時間として挙げられていることであり、現実との戦いを回避し、世の中に背を向ける若者の姿が浮かび上がってくる。このような人間関係の希薄さが、仮想的有能感の形成に繋がっている。

他者軽視傾向から推測する

現代人の特徴を理解するための一つの心理的構成概念として、「仮想的有能感」を提唱したが、筆者の観察や洞察を実証していくには、まず仮想的有能感の個人差を測ることが不可欠である。今回は一度に多くの人たちに実行できる質問紙法による査定を試みた。

さて、仮想的有能感は、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義した。しかし、質問紙で問う際、直接的に「あなたは過去の実績や経験に基づくことなく、他者の能力を低く見積もることに伴って生じる本物でない有能感を感じますか」という質問項目で問うことはできない。誰だって自分が本物でない有能感を持っているとは言いたくないし、そう思っていないだろう。仮想的有能感とは、自分ではほとんど意識していないのに、他者の評価しがたい言動を観察したときに心の奥底から自然に吐露される、「フン、バカめ、俺の方が有能だ」というような感情を含んだ瞬時の認知である。その仮想的有能感を最も反映しやすいのが、熟知しない他者に対する評価であるように思われる。具体的に熟知している人の評価は、外からの情報量が豊かで、それに依拠することになるが、よく知らない人や漠然とした他者に対する評価は、それらについての情報故が少ないので、自分の内面を大いに投影させることができるためである。そこで他者軽視傾向＝仮想的有能感と考えて、他者軽視傾向を測定する尺度を作成することにした。

筆者らが現在使用している尺度（第二版）の11項目は表5-1のとおりである。例えば、「自分の周りには気のきかない人が多い」「知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い」「自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない」「私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる」などで、直接的には他者の能力を軽視したり、蔑視する傾向を尋ねている。しかし、内面的には自分の能力評価として、「他者に比較して自分はよく気がきく」「他者と違って自分は知識や教養があってそれなりの地位についている」「自分は他の人にはできない大切な仕事を請け負うことができる」「他者の意見に比べて自分の意見は優れている」といった仮想的有能感が生じているものと考えられる。

なお評定の仕方は表に示したように五段階で行っている。---中略---

ところでこの尺度の妥当性については今後もさまざまな角度からの検討を必要としようが、ここでは他者による観

項目	自己評定
(1) 自分の周りには気のきかない人が多い	12345
(2) 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる	12345
(3) 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	12345
(4) 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	12345
(5) 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	12345
(6) 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない	12345
(7) 他人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い	12345
(8) 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	12345
(9) 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	12345
(10) 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	12345
(11) 世の中には、常識のない人が多すぎる	12345

1:全く思わない、2:あまり思わない、3:どちらともいえない、
4:ときどき思う、5:よく思う

表5-1 仮想的有能感尺度の項目

察評定結果との関係について示しておこう。仮想的有能感は本人自身が無意識的なものであるが、それを持てば、現実の行動には時々それが表出されると考えられる。特にかなり長期にわたって複数の対象者を見ている人からは対象者の仮想的有能感の相対的評定は可能と思われる。そこで二つの高校の二つのクラスの人たちに仮想的有能感の測定を実施すると同時に、担任および副担任の先生に仮想的有能感の概念について説明したうえで、クラス全員の生徒の仮想的有能感の高さを三段階（高・中・低）で評定してもらった。

この結果は図 5-2 のようで、先生から同じ評定を受けた生徒ごとに仮想的有能感得点の平均点を求めた。生徒の自己評価による尺度得点と先生の評定値はほぼ対応しており、一定の妥当性があると言える。

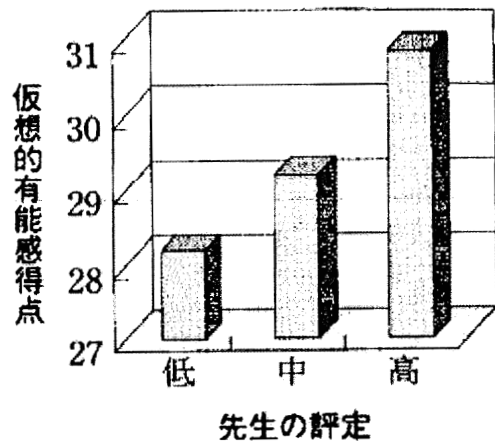


図 5-2 先生の評定と仮想的有能感得点との関係

仮想的有能感を持つ人の特徴

先の尺度と他の関連諸概念との関係についてこれまでにいくつか研究を行ってきたが、かなり確信を持って言えるのは以下のような特徴である。

第一には共感性との関係で、仮想的有能感の強さと負の関係にあることがわかっている。つまり仮想的有能感が高いと見なされる人ほど共感性が乏しい。これは他者軽視という概念から考えても、共感性が低いからこそ他者軽視しやすいとも言える。共感性が高いということは言うまでもなく相手の立場に立って考えることができ、相手の感情を共有できることを意味している。他人一人ひとりが自分と同じようにかげがえのない人間であることを深く認識していれば、安易に他者を軽視することはできないだろう。

第二は友人関係の狭さである。仮想的有能感の高い人は友人が少ない。共感性がないから友人があまりできないとも言えるが、彼らは自ら友人をえようという気持ち自体が乏しいものと考えられる。身近な他者である友人が多ければ、自然にコミュニケーションも多くなり、他者と照応させて自分を見ることができ、現実的判断ができるものと思われる。

第三は第二のことに関係するが、仮想的有能感と友人関係満足度には負の関係が存在することである。つまり、仮想的有能感の高い人は友人関係に不満なのである。それはどのような理由で不満なのかこれまでの調査ではわかっていない。ただ、彼らは友人関係だけでなく、家族関係についても不満であるという結果があり、円滑な人間関係を促進・維持すること自体が不得手のようにも思われる（「仮想的有能感の構成概念妥当性の検討」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、心理発達科学、51 巻）。

軽蔑や嫉妬を含む仮想的有能感

他者を低く評価したり、批判的に見たり否定的に見ることで、自分の側に仮想的有能感が生じるとすれば、そこには軽蔑や嫉妬という感情が渦巻いていると思われる。おそらく、現実生活の中で、多くの人たちは、自分が期待しているほど賞賛されたり受容されたりしているとは思っていない。それどころか、正当に評価されていない、と感じている場合が多いのではなかろうか。

その状況乗り越える最も安易で手早い方法は、周りを低く評価して、自分を浮かび上がらせる方法であろう。例えば、ある選挙で自分でなく他の候補者が当選した場合、あるいは就職試験で他の人たちが合格、自分が不合格であった場合、「チェッ、あんなレベルの低いやつらはふさわしくない」というような軽蔑の感情を抱くことで一時的に自分を持ち上げ、仮想的有能感を感じるように対処しているのではなかろうか。したがって、通常の有能感は喜びや自信といったポジティブな感情に支えられるものであるが、ここで言う仮想的有能感は軽蔑や嫉妬といったネガティブな感情を含んでいる。

基本的に仮想的有能感、本人が自分にも周りにも満足した幸せな状況では、あまり生じるものではない。何かうまくいかなかったとき、不満なことが生じたときに、それを補償するために無意識的に生じる可能性が高い。

現実的に仮想的有能感が働くのは他者の失敗場面ばかりではない。中立的な場面、例えば先の例に挙げたような母親が担任の先生に学習を塾に任せていると話す場合などに

も、仮想的有能感が頭をもたげてくる。しかしこれも、日頃、学校側の学習指導のあり方に不満を持ち、うまくいってないと思っているために仮想的有能感が生じやすいのであろう。

仮想的有能感は、軽蔑や嫉妬を包含しているという点で後ろめたいところがある。そのため無意識の淵においやられやすいのである。和田秀樹氏は嫉妬について次のように言う（『"エンビー型嫉妬"が日本をダメにする！』『潮』2005年3月号）。

「一般に、嫉妬というのは、『相手のほうが優位にいたり、満たされている状態にいるのを体験した際に感じる不快な感情』と定義できるだろう。精神分析の世界では、この嫉妬を二つに分けて考えることが多い。／一つは、ジェラシー型の嫉妬である。……その不快感をバネに、相手に勝とうと思ったり、そのために頑張れる源になるような嫉妬を『ジェラシー型嫉妬』と呼びたいと思う」「このように優位な相手に感じた嫉妬のために相手に激しい攻撃性を感じる心理を、クラインは『エンビー』（羨望）と呼んだ。／私も、嫉妬のために相手を貶めなくなったり、相手が何らかの不幸な状態になってくると嬉しくなるようなタイプの嫉妬を、二つ目の『エンビー型嫉妬』と呼びたい。／相手が優位であると感じた際に、その悔しさをバネに自分を高めようとする嫉妬を『ジェラシー型嫉妬』、相手の足を引っ張ったり、相手の不幸を喜ぶような嫉妬を『エンビー型嫉妬』と分類できるのである」「昔であれば、家が貧しかったり、親の学歴がなかったりすると……『見返してやる』とか、這い上がるためには勉強するというトレンドがあった。ジェラシー型嫉妬をバネとして、学歴や地位の高い人間にいつかは勝とうと努力する」「今は……親にも子供にも諦めが蔓延していることが、各種調査から読み取れる。しかしながら、完全に諦めて、成功者を祝福しているかということ、どうもそうは見えない。テレビのワイドショーなどを見ている、成功者が落ち目になったり、失敗したりすると、ここぞとばかりに袋叩きにする。そして、一般大衆が、それを一緒になって喜ぶために、テレビの視聴率は上がり、雑誌も売れる。これはまさに、ふだんは諦めている大衆のエンビー型嫉妬が噴出したものと考えていいだろう」

仮想的有能感にはジェラシー型嫉妬よりもむしろエンビー型嫉妬が多く含まれていると言える。

自己愛との距離

仮想的有能感は自己愛的なものだ、という見方が当然、成立する。大潮恵一氏は、自己愛者のイメージを、「自分のことしか関心がない」「人から愛されることを求めるが、人を愛することはできない」「あきれほど自分に自信がある」「自分の魅力に酔い、客観的に自分をみることができない」としているが、確かに仮想的有能感の高い人物像と重なるところがある（『満たされない自己愛－現代人の心理と対人葛藤－』ちくま新書）。

自己愛も仮想的有能感も、利己主義的、自己中心的という点では類似していよう。しかし、自己愛は自己の内部で初めから自己評価のかたちで生じるのに対して、仮想的有能感とは他者評価の仕方を通して生じるものである。自己愛者は、結果として他者を軽視することはあるかもしれないが、初めから他者軽視を想定しているわけではない。それゆえ、個人主義の文化が、自己愛の時代よりもさらに浸透した時代に、仮想的有能感は蔓延すると思われる。

かつて貧しい社会で必然的に助け合わねば生きていけなかった人々は、豊かな社会の中で、そのような必要性は弱まり、むしろ他者とつきあっていくことによるストレスが増大した。そこで、人同士の関わりに意義を見出せず、自分のことしか関心を持たない自己愛者が増大した。しかし、彼らが自己評価を確実なものにするためには、自分の枠内だけに留まるわけにはいかない。いや、自己愛だけでは、他者からいつ自己評価を貶められるかわからない。だとすれば、先手をうって他者を低く評価することで、有能感の感覚を確実なものにしておく必要がある。つまり自己愛だけでは自分を守れないと、現代人はうすうす気づき始めたためではなからうか。

また、こうも言うことができるかもしれない。あきれほどに自分に自信があった自己愛者たちは、経済的不況やさまざまな制度改革の嵐の中で、自分の感覚と現実の行動との間の大きなズレを認識し、どこかに不安を感じ始めた。不安定な感覚を元に戻すためには、自分以外の他者の能力を低く査定し、自分は負け組でなく勝ち組であることを、先手をうって宣言してしまう必要がある。

さらに自己愛という概念と仮想的有能感という概念の相違点は、前者の方がやや広範囲な内容であるという点である。小塩真司氏は、強制選択法の「自己愛人格日録 NPI (Narcissistic Personality Inventory)」を五段階評定に変え入学生に実施して、全項目を類似した項目同士に群分けし、三つの項目群を抽出している（『自己愛の青年心理学』ナカニシヤ出版）。

第一の項目群は「優越感・有能感」で、例えば「私は周りの人たちより、ずばぬけたものを持っていると思う」「私は他人より有能な人間であると思う」などの項目からなる。第二の項目群は「私には、注目的になってみたいという気持ちがある」「私は人からはめられることを望んでいる」などにより構成されるもので「注目・賞賛欲求」と命名された。さらに第三の項目群は「自己主張性」と呼ばれるもので「私は自分の悪鬼をはっきり言うほうだ」「どうやら私は、控えめな人間というには程遠い人間だと思う」等の項目でできている。

このうち第一の項目群が、自分の能力についての自己評価という観点で、他者軽視に基づく仮想的有能感とは最も近い。しかし自己愛は、第二の項目群や第三の項目群など欲求等の情意面も含む幅広いものと考えられよう。すなわち、仮想的有能感は、人間の能力的側面に焦点を当てている（しかし、それはむしろ学習能力というような順の狭いものではない。人間としての総合的な能力とでも言えるもので、優劣の差が存在するものである）。だが、自己愛はそれだけでなく、承認欲求、自己主張性といった人格的側面も包含している。

社会・文化的要因

今日、若者を中心に多くの人々の心に仮想的有能感が潜み始めていけると言えるだろう。もちろん、個人差もあるが、ここでは仮想的有能感の形成に関わる社会・文化的要因について考えてみよう。

仮想的有能感の形成要因として、第一に新しい電子機器に対する適応の問題がある。若者は概して、携帯電話、コンピュータ、デジタルカメラ等を自由に操ることができる。最近の機器によって、人間一人の手作業ではできない複雑なことや、パワーを要することがいとも簡単にできる。それは自分の操作のうまさによるものでなく、機械の性能のよさに起因するのだが、それを多くの若者は自分の力であるかのように誤解するのである。とても一人の能力や腕力でできないことを、機械は短時間に実に巧妙にやってのけるようになった。それを簡単に操作できるごく普通の若者たちは、自分自身が有能になったように錯覚するのである。

第二はマスメディアの発達であろう。現在、われわれはテレビやインターネットを通して、瞬時にして世界の動きを知ることができる。これは有能さに関係なく誰もが体験していることであるが、昔、世界の様子を直に見ることができなかった人たちに比べると、世界そのものが自分の手中にあるような錯覚に陥り、自分が有能であるように誤解するのである。そして、マスコミが伝えるものについては、自分が当事者ではないので、客観的に一次元高いところで、その出来事を見ているような気分になる。観察者や視聴者は誰もが解説者のような気分になり、上から見下ろしているような錯覚に陥る。原因帰属の研究で、行為者より観察者は、行為者の行動の原因を行為者自身の要因に帰しやすい、という知見があるが、観察者になる機会が多いと、実は自分のことを見つめようとせず、代わりに直接知らない他者の表面的な欠点などが、大いに気になるようになる。

第三は個人主義が先鋭化することで人間関係が希薄化し、直接問題となっている相手の力量なり有能さなりを、相手と関わることで知ろうとしないためであろう。そのため、自分以外の人を多面的に見ることができなくなっており、粕に他者の優れた部分については、あまり意識しないようになっていっているのではなからうか。教育という観点から言えば、少子化が進み、個別学習に力点が置かれることで、多くの人と協力して学ぶとか何かを作成するといった機会は減少しつつある。それだけ他者のよい面を見出す機会が失われていると言えよう。

第四は人を軽く扱う風潮である。例えば、テレビのお笑い番組などが増えて、人々が笑う機会が増えているが、他者の欠点を笑いのめすようなことが、平然と行われている。さらに、テレビも新聞も、報道の自由をいいことに、注目される人物を裸にしてしまう傾向がある。特定の人を密着取材して、すべての生活をオープンにしてしまうようなところがある。かつては、まずい部分は隠蔽されて、いいところだけが強調され、大衆には伝えられることが多かった。このため「尊敬される人物」というものが、多く存在したのかもしれない。しかし、現代はマスコミが視聴者の受けを狙うために、あらゆる情報を包み隠さず、しかも特に悪いところをクローズアップして大衆に示そうとする。そのため、人は他者を一般に尊敬せず、見下げるようになるのではなからうか。これは第二に述べたことと重なる面を持つ。

第二から第四については、若者だけでなく、現代人すべてが仮想的有能感に陥りやすい要因と言えるかもしれないが、文化の変化の影響を最も受けやすいのはやはり若者たちであろう。

IT メディアの影

ここでは、仮想的有能感に及ぼす社会・文化的要因のうち、特に IT メディアに限定して考えてみよう。メディアが人間の心理に及ぼす影響について、加藤晴明氏は次のように書いている（「朝日新聞」2003年12月3日、名古屋版夕刊）。

「究極の個人所有メディアの小さなディスプレイという『窓』は、『自己のまなざし』そのものであり、このまなざしを通じて私たちは自分がメディア表現者として、自己愛に満ちた自分物語をある程度自在につくりあげる。／だがそこに落とし穴がないわけではない。自己のまなざしだけが肥大していけば、『他者のまなざし』は気にならなくなる。自己の肥大化・他者の縮小は、メディアの中でなら何をしていてもよいという感覚を助長し、プライバシーや著作権侵害、さらには情報システム破壊など、様々な犯罪行為を引き起こす。パソコンであれ携帯電話であれ、メディアを媒介にしたコミュニケーションは、ともすれば独りよがりの感覚を醸成するからだ」

一方で氏は「携帯電話で……交信をするのは……『他者の手ざわり』や『他者のまなざし』を感じ取ることで、結果として自己の肥大化を調整しているのかもしれない」とも述べている。

しかし、ここで強調して述べられているのは、現代のような IT メディアを媒介にしたコミュニケーションが実は他者を無視した自己主義的な感覚を作り上げやすいという警告である。電車に乗り、あたりを見回せば、それも若い中・高校生に限らず、結構頭に白いものが交じる人たちも右手に携帯電話を持ち、何やら気忙しそうにボタンを押している。しかも、車掌がたびたび「携帯電話のご使用は周りの人の迷惑になりますからご遠慮ください」というアナウンスをしているにもかかわらず、である。このような光景は明らかに他者を無視して自分だけの世界に入り悦に入っている証拠ではなからうか。

現実の世界を自由自在に飛び回るのはむしろかしいが、IT メディアの中を自由に動き回っても、所詮自分が所有している世界であるから、他者からとやかく言われることはない。IT メディアの中で自由に飛び回っていても、実質的な障害がないから、自分がなんと有能であるかという錯覚に陥ることになる。本当は高度な機器が本人の意思を的確に表示してくれるのだが、自分の力で思いどおりの情報を収集できているような気持ちを持つ。

Eメールなどを使用していて感じるのは、ほとんど知らない者同士の場合に、相手への要求や期待が強くなるということである。会ったこともない人の間でも、そして、おそらく面と向かっていたらできないような要求でも、Eメールを使えば容易に行うことができる。人々は IT メディアにのっかることで、仮想的有能感を体得するのかもしれない。面と向かってはなかなか反対意見が述べられないのに、メールの上だとかなり手厳しい批判を平気で行えたりする。

ネットの中の有能感

2004年初夏に、長崎県佐世保市の小学校で、小学六年生の女兒が同級生にカッターナイフで頸動脈を切られ死亡する、という痛ましい事件が起きた。新聞の報道によれば、殺害した女兒が「ホームページに面白くないことを書き込まれたこと」が動機の一つであるらしい。二人はパソコン画面上でやりとりする「チャット」でよく遊んでいたという。このような画面上で人間の心は、面と向かって話すときや声を伴う電話とは異なるものになる。端的に言えば「大胆なことも文字でなら書ける」ということになる。

加害児童のホームページにも「うぜークラス」「エロい事考えてご飯に鼻血垂らすわ」「下品な愚民や」「高慢でジコマンなデブスや」などといった衝撃的な文字がならんでいたという（『AERA』2004年6月14日号）。この文字の中には、ここで言う仮想的有能感が見え隠れするようにも思われる。人は誰でも多かれ少なかれ、醜いこと、嫌なことを抑圧して生きているが、画面上ではそれが一気に噴き出すこともある。そしてインターネットは、自分の都合のよいときにアクセスし、また、都合が悪くなれば、簡単に切ることができる。ここで述べている他者軽視に基づく仮想的有能感も、このような状況で顔を出しやすいのではなからうか。

総務省の2003年末の調査によると、小学生のインターネット利用率は62パーセントに達しているという。パソコンだけでなく、携帯電話やゲーム機を持つ小学生も多い。もちろん、彼らは小さい頃からテレビに日常的に接しているはずである。一方的な強い刺激は、子どもたち本来の自然や生き物への感受性を鈍らせ、物事を好き嫌いだけで判断しがちにする。情報機器を手にした子どもたちは、自分だけの居心地のよい世界をつ

くりそこに安住しようとする。人間の本来の付き合いというものは、文字としての言葉の内容だけでなく、直接発せられた言葉の抑揚、あるいは表情、しぐさなどを総合的に処理して、成立するものだろう。しかし、ネットの世界は情報量が十分でなく、勝手な判断が横行することになる。パソコンでメールやインターネットを使う際のルールについてもっと真剣に教育する必要がある。

インターネット好きでドラマが嫌い

ここでは宮川純氏の実証的研究に基づいて見てみよう（「インターネット利用と仮想的有能感の関連」名古屋大学大学院教育発達科学研究科 平成 16 年度修士論文）。21 世紀はインターネットがますます進展し、われわれの生活様式を変化させることは、間違いない予測と思われる。宮川氏は、インターネットによって提供される情報には、他の情報メディアと比較して有害情報が多いことに、まず着目している。「インターネット白書（2001 年）」によると、インターネット利用者のうち、49.8 パーセントの人が有害情報を目にしたことがあり、その種類はわいせつもの（60.1 パーセント）、コンピュータウイルス（44.9 パーセント）、誹謗・中傷・デマ（37.7 パーセント）となっているという。このうちの誹謗・中傷は、まさしく他者の評価を下げることにあたり、他者軽視を適して仮想的有能感を感じる行為と似ていることになる。インターネットは、匿名性が確保されているので、それだけ自分の実績に関係なく、他者を気軽に批判できると言える。

そこで、氏はインターネット利用頻度と仮想的有能感の高さ（ここで仮想的有能感の測定は表 5-1 に示した 11 項目のうち 9 項目が使われている）の関係に注目した。そして、インターネットの中でも、誹謗・中傷の書き込みが多いと言われる「2ちゃんねる」の閲覧との関係も調べてみた。結果はインターネット利用頻度が高いほど、また「2ちゃんねる」を閲覧する人の方が、しない人よりも、仮想的有能感が高いことがわかった。調査研究なので、厳密には因果関係はわからないが、インターネットの利用と仮想的有能感が密接な関係にあることは示されたと言える。

さらに、氏は他の情報メディアの閲覧頻度との関係についても調べている。それらは新聞、雑誌、テレビ番組（ニュース、バラエティ・ドラマ、アニメ、スポーツ）である。ここで興味深い結果は、テレビ番組との関係であり、仮想的有能感とニュース番組の閲覧頻度とは正の、ドラマ番組のそれとは負の関係が示されたことである。すなわち、仮想的有能感が高い人ほど、ニュース番組を見やすく、ドラマ番組を見ないと言える。ニュース番組は不特定の他者に関する情報を提供している番組であり、自分と切り離して批判することが容易なものではある。

また、近年はどのテレビ局も、何か事件が起こると競って加害者を追跡している感があり、人々の仮想的有能感を助長しているようにも見える。仮想的有能感の高い人は、毎日のように流されるニュース—それはネガティブな意味を持つ内容が圧倒的に多いが—それを眺めながら、「何やってんだ。バカ者め」という内言を発して、少し有能感を感じ、楽しんでいるのかもしれない。一方、ドラマ番組を見るためには多くの場合、登場人物への共感的理解がないと面白くない。共感性の低い仮想的有能感の高い人たちは、ドラマに感情移入ができず、つまらないものに感じられるのだろう。

誰にでもある仮想的有能感

仮想的有能感というのは、それほど特殊な現象でないとも言える。もともと人は、他者にいいかっこうをしたい。実は、筆者も若い頃、電車の隣の若者が「平凡パンチ」などを広げているのを小バカにしたように、とてもすらすらとは読めない英字新聞を広げていたことがある。これは明らかに、仮想的有能感を求めていたのだろう。仮想的有能感とは、人が適応的に生きるために、誰もが備えているものかもしれない。

また、仮想的有能感を一種の思いあがりとして解釈すると、自己自身に期待を抱くことで動機づけが高まるように、それがよい方向に作用することもある。司馬遼太郎氏は次のように述べている（『人間というもの』PHP 文庫）。

「人間、思いあがらずしてなにができませんか。美人はわが身を美しいと思いがあっておればこそ、より美しくみえ、また美しさを増すものでござります。才ある者は思いあがってこそ、十の力を十二にも発揮することができ、膂力ある者はわが力優れりと思えばこそ、肚の底から力がわきあがってくるものでござります。南無妙法蓮華經の妙味はそこにあると申せましょう」

自己期待と仮想的有能感が重なる部分があることはまちがいない。しかし、純粋な自

己期待は自分自身への明確な確信から多く生じているのに対して、仮想的有能感はそのような自分に対する確信の基盤が不安定である。

しかし、複雑な現代社会の中で自分を確立していくためには、明らかに自己主張が必要になる。この場合、相手への説得を強め、自分の意見を通そうとすればするほど人は他者軽視に直面せざるをえない。特に動機づけを考えると、ある程度仮想的有能感を抱いたほうが行動の推進力が高まるとも言える。

現在の社会では、若者だけでなく、大人も仮想的有能感を持つ人が少なくないことは、既に述べてきたとおりである。電車の中で肩がふれただけでチェットつぶやく人たちは、「こいつめ、オレ様を誰だと思っているんだ」というような日をしている。おそらく、このような仮想的有能感は、多かれ少なかれ誰にも存在する。

さらに、戦前や古い時代にも、仮想的有能感のようなものがなかったとは言えない。社会的地位が明確になっていた分、地位の高い者や身分の高い者、あるいは地主たちが、地位の低い者や小作人に対して仮想的有能感を抱くことは、多かったように思われる。ただし、彼らは社会的な自分の位置づけの中で、自分以下の地位や身分の人を見下げ、軽視することを、当然のこととと思っていた。一方で、自分より上の地位の人には、蔑視されることが当然と考えていた。その場合の仮想的有能感は、現実の実力や成功経験と必ずしも結びついていないという意味で確かに仮想的なものだが、社会制度によって持つべき人が持っていたとも言えよう。

しかし、現代のそれは社会的な付置づけからくるものではない。極端に言えば、ごく普通の人、目上の人、さらには総理大臣や天皇をも軽蔑的な視角から見下し、有能感を感じているということも推測される。また、その種の有能感を感じている人の数は、現代では大幅に増加していよう。近年では客観的に見てごく普通の人、あるいは客観的に見て決して有能でない人も含めて、多くの人勝手に仮想的有能感を感じる状況にあると言える。

(出典：速水敏彦『他人を見下す若者たち』講談社現代新書 1827(2006年)。なお問題文では、縦書きの原文を横書きに変えており、漢数字を算用数字に変えている。)